

大学4年間で大きく変わる！

経営情報学部4年 荒井 綺花

2015年4月、多摩大学に入学しました。入学当初から現在までを振り返ってみると、本当に多くのことを経験させていただいたと思います。入学当初は、右も左も分からない状態で、これから何かやりたいことが見つかるだろうと漠然とした想いを抱いていました。

大学で何かやりたいと思っていた私は、大学1年生から寺島実郎学長が主宰するインターゼミ（社会工学研究会）に参加しました。毎週土曜日の5限から九段サテライトで行われています。同じ学部生だけではなく、大学院生やOBOGの方など様々な人達と共に学ぶことができるゼミです。班に所属し、1年かけてグループで研究し、論文を執筆します。正直、初めは話についていくので精一杯でとても大変でした。毎日膨大な資料を読み、執筆をした経験は今でも忘れられません。1、2年生ではサービス・エンターテインメント班、3、4年生ではAI班に所属し、先生に丁寧に指導していただきながら論文を執筆しました。このインターゼミでの学びは、私が大きく変わるきっかけになりました。私にとって知の基礎となり、物事を捉える視点が180度変わりました。インターゼミでは、講義の初めに寺島学長からお話があります。内容は、時事問題や近況報告など様々です。大学1年生の時にその話を聞いても正直難しく、分からないことばかりでした。ですが1年生の当時印象に残っていたのが、働くことは「カセギ」と「ツトメ」の話でした。その時は、ただ漠然と就職活動の時にこういうことを考えるのだろうなと思っていました。

また短期留学の機会をいただき、1年生から毎年海外へ渡航していました。1年生の春休みにニュージーランドへ短期留学に行きました。ほとんど英語が話せない中で初めての留学でしたが、クラスメイトやホストファミリーにも恵まれ、楽しい語学留学でした。世界各国の人達と触れ合い、言葉だけではなくコミュニケーションや異文化を学びました。また他国の学生の勤勉さに衝撃を受けました。2年生では先生のご紹介で美容師のイベントの通訳に参加してもらい、また協定校である中国の広東へ研修に参加しました。言葉が通じなくても想いがあれば通じるということや中国では実際に働いている人達と話す機会があり、海外で働くとはどういう事なのか、日本との違いを学びました。国の経済状況で、働き方が変わるということを学びました。3年生では、サムライカレーというカンボジアで行われるインターンシップに参加しました。実際に自分たちで企画販売し、自分たちは何ができて、できないのかを考えました。実践的なプログラムで、就職とは、働くとは何かを考え、学びました。

短期留学を終え、就職活動を本格的に始めていきました。と言っても

何から始めていいか分かりませんでした。そんな時、インターゼミで学長の話されていた、働くことは「カセギ」と「ツトメ」の話をふと思い出しました。寺島学長の著書である「何のために働くか」（文春新書）で詳しくは記述されていますが、この話が私の就職では、軸となりました。特に「ツトメ」の自分は何で社会参画や社会貢献をしていきたいか強く考えました。私は、生活を営むための衣食住のどれかの分野で社会貢献したいと考えました。軸が決まり、冬頃からインターンシップや企業の選考を本格的に始めました。本当に自分がやりたいことは何かを探し、見つけた就職活動でした。4月からは、私が考えた「ツトメ」のできる会社で働きます。

最後になりますが、私が大学生生活で学んだ2つのことがあります。それは、「とりあえずやってみること」と「感謝」です。「とりあえずやってみること」は、やらない？と声をかけていただいたら挑戦してみるということです。なぜかという、挑戦した人にしか分からない景色があるからです。大学生生活で様々な挑戦をして経験したからこそ得たものは、沢山ありました。もちろん行動したくない時も沢山ありました。ですが、行動しなければ何も始まりません。行動した結果は、成功か失敗のどちらかです。私は、後者の方が多かったと思います。何も分からないまま流れに乗っていたら、失敗の連続でした。そんな中でも、反省をし、行動したからこそ結果を出すことができたのではないかと思います。次に「感謝」です。大学生生活を通して、本当に多くの人に支えられていて、何事も当たり前ではないということを知り、何不自由なく生活ができることに対して、感謝することを忘れていたと思いました。大学生生活で多くの人との出会いに恵まれ、多くの機会を与えていただけたことが有難いです。様々なことを積み重ねた結果、3年前の自分では想像できなかった自分になりました。入学当初、これから何かやりたいことが見つかるだろうと漠然とした想いを抱いていましたが、今ではやりたいことが明確になり、夢を持つことができました。4月からは社会人として、新たなステージで日々精進し、周りへの感謝を忘れない人になりたいと思います。

多摩大学は、様々な挑戦の機会があり、環境に恵まれていると思います。また多くの先生や職員の方々が手厚くサポートをしてくれることが他大学にはない強みだと思います。ぜひ様々なことに挑戦し、自分自身の成長に繋げて、自分が何をしたいか、何をしたくないのか、自分の人生を考える大学生生活であれば楽しいと思います。ほんの小さな行動が、大きく未来を変えるのではないのでしょうか。



インターゼミ2017年度AI班の集合写真



ニュージーランドでの短期留学

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

人に想いを伝えるということ

経営情報学部 3年 井 汐里

「この貴重な経験を形に残したい」そんな想いを胸に教室を訪れた。教室では木村先生が映像制作と表現について熱を込めて語っていた。企画・構成、編集…と、制作のフロー全てを学ぶことがわかった。それは私が勉強してみたいと思っていたことそのものであった。制作のノウハウに加えて先生からアドバイスをもらえるのなら、より質の高いものをめざせるのではないかとワクワクして受講を決めた。

講義の中で最も心に残ったのは「メッセージ性」である。「あなたは今、誰に何を伝えたいですか？」そう問われた私の「答え」がその作品を目にした人に伝わる、そんなメッセージ性が映像制作には不可欠だと学んだ。その軸がブレなければ想いが伝わるはずだ。よって、良い作品を作り上げるには、企画を考えることがなによりも要になる。

取り組んだのは「デジタル・ストーリーテリング」という制作手法だった。「人々の想いや日常のあれこれを、対話を通して物語化し、写真と本人の声でスライドショー形式の作品に作り上げる」というものだ。そして「現代社会における対話空間と物語の欠如」を埋める創造的な営みだとも。手法としては決して派手ではないが、この手法だからこそ生み出せるシンプルさと伝わりやすさがある。今の時代にこそ相応しいと思った。

テーマ決めの際、予め形にしたい事柄を持って受講を決めた私に迷いはなかった。「カンボジアの村に行って五感で感じたこと、その地での学び」をテーマに定めた。ボランティア活動で支援先の現地視察した経験だ。誰もがができる経験ではないからこそ、実際に現地に行った私だからこそ、伝えられることがあるはずだ。メッセージは「自分の小さな行動でも誰かの役に立てる」ということだ。日本で支援活動をしていて、この活動は本当に誰かの役に立っているのか？と思うことがあった。しかし、現地で大勢の子供たちに出会い、「オークン！」（ありがとう）と言われたその瞬間、「ああ、この活動に取り組んできてよかった」と自信を持てた。普通の大学生でも遠く離れたカンボジアの子供たちのためにできることはあるのだと改めて思った。日本の暮しとの違いを肌で感じ、視野も広がった。そしてこれを誰かに伝えたい、知った世界をもっと多くの人たちに伝えたい、知ってほしいという気持ちが芽生えた。

苦戦したのは写真を選ぶことだった。現地で撮った写真はどれも子供たちの笑顔が輝く素敵なものばかりで本当に苦労した。ようやく作り上げて提出。だが、アドバイスをもとに再制作にチャレンジ。自分でもメッセージが弱いと思っていたのだった。作り直しでは最後のスライドにいちばん伝えたい言葉、「誰かのためにできることを」とテロップで入れた。その一言で全体がギュッと締まった。「気持ちのこもった作品には力があるな」と先生。嬉しかった。

映像は伝えたい想いを表現するには効果的な手段だ。加えて、自らの声で語ることで、想いととも温もりまでも伝えることができることを学んだ。この講義は、私にとって、願いと想いを叶えることができた、とても意味のある時間となった。何かに取り組むとき、目的をしっかり定めて行動することで得られるものは全く違うのだということも学んだ。この経験を活かして今後も「誰かのためにできること」に取り組んでいこうと心に決めた。



子供たち 100人と運動会 2018年3月



私の髪に花を付けてくれた子供たちと

考えるより、先ず行動することもいいもんだ

経営情報学部 3年 関 謙二郎

産業社会特講「メディア新時代の情報表現Ⅱ」。春学期にⅠを履修していたこともあり、秋学期も再び履修することにした。

前半は「デジタルストーリーテリング」の企画・制作が課題。作るのは2回目になるから、作り方こそ分かってはいるが、如何せん「何を題材にするか」というテーマが思い付かなかった。企画の発想というものがいちばん肝心ののだが、これが簡単そうで難しい。

そんな時、ふと思いついた。「私の住んでいる町には“高台”のような場所がある」こと。そして、「小さい頃から、私は、その高台のような場所がなんとなく気になっていた」ことを。

これといった下調べもせず、買い物帰りの流れでスマートフォンを片手に足を踏み入れてみた。その“高台”に行くには、石段と坂道を登って行かなければならない。近くにありながら、まだ足を踏み入れたことのない石段と坂道だ。気分はまさに冒険家さ！

登りはじめて少しドキドキ、何となくワクワクしてくる。坂道の途中、目の下に町が広がる。近所の公民館、見慣れたスーパー、そして住宅街。見渡した私の住む町、なかなか面白い景色だ。自分の家も探してみたが、どの家も似たような色をしていて見つけられなかったのは内緒だ…

高台に登り、歩いていると、お茶畑を見つけた。私の住む町はお茶の生産地で、町内に茶畑があることは知っていた。でもこんなところにも茶畑があるとは。その日、茶畑に人はいなかったが、きちんと手入れがされている。少し蜘蛛の巣があったけど…

茶畑を過ぎて先に歩くと、今度は「鐘のようなもの」を見つけた。作品にそうコメントを付けたら、木村先生曰く「火の見櫓（ひのみやぐら）だぜ、これは。そうか君たちの世代はわからないか」とのこと。火災の早期発見や町内へ知らせるための見張り台らしい。住宅が並ぶ中に立つ姿は、どこか趣があり、歴史を感じさせた。はしごには木の板がくり付けられていて、人が上れないようになっている。台そのものや木の板も古びていて、もう長く使われていないのだろう。今になってみると、なぜ使われなくなった今でも残っているのか気になるところだ。

更に歩いていくと、今度はお寺の前に着いた。実はこのお寺は、以前、別の道を通って来たことがあったが、この日初めて登った坂道を通っていけば、お寺の前に道が繋がっていることが分かった。新しい近道を発見して、少し得した気分だ。

今回の課題の制作を通して、身近な、今まで踏み入れたことのない「場所」に、ふと、足を踏み入れて、いくつもの「新しい発見」をした。そこで感じたのは、「考えるよりも先ず行動することも悪くないものだ」ということだ。今回はちょっとした思いつき（本音を言うと、事前リサーチして取材へと教室で習った制作作法が、ちょっと面倒くさかっただけだから、何となく石段に登り始めたが、新しい発見があった時の感動はなかなか新鮮だった。普段見慣れているまわりの身近なところに、まだ知らなかった「未知の世界」がある面白さを体験することになった。

私は普段から、物事を慎重に考えてから行動することが多く、時にはそれが仇となることもあった。だが、時には深く考えずにすぐ行動する「冒険心」も悪くないものだ。課題の企画・制作と向き合った、秋のちょっとドキドキワクワクした発見だった。



火の見櫓発見！タイムスリップした気分



冒険への石段、何が待っているのか？

人生のターニングポイント

グローバルスタディーズ学部4年 田邊 輝広

最初は今受けられる大学の中で唯一教員免許が取れるからという単純な理由でした。志望校に落ちて、そこから社会に出ることを考えたときに教師というのが大学のブランドの影響が少ないと考えたからです。教職課程もあるし学部名で英語を勉強している大学なのだろうという印象で入学しました。1年生の間は第1志望の大学にもう一度受験しようかと考えながら勉強をせずに周りにはそんなことを話していて、今思うと恥ずかしくなります。努力をしていなかったの、とにかく教職課程のために大学に通っている感じでした。1年生で1番印象に残っているのは、春休みにシンガポールに1週間行ったことです。初めて海外に行きました。大学の研修であり友達もいたのでストレスもなくとても楽しかったです。そして、AEP（英語集中教育）で1年間英語に触れてきて英語で話すことにあまり抵抗がなく、何よりも通じたことが嬉しかったです。初めてこの大学にいて何かを学んだと感じました。

2年生からはコース選択があり教職課程だと国際教養コースの内容が多いと思いホスピタリティマネジメントコースを選んだと思います。コース選択をすると自分が大学と聞いてイメージするものと同じような授業でした。その年の5月には20歳になっていたこともあり、大学生であることを実感していました。そして、この時に1度目のターニングポイントがありました。インターシップ概論・実習が授業であり、公益社団法人藤沢市観光協会さんに10日間インターシップに行かせていただきました。教職関連のことにしか触れてきていない私にとってはとても貴重な経験をさせていただきました。それ以降もご縁があり、花火大会や春祭りのアルバイトを紹介していただきとてもお世話になりました。教職以外にもいろいろな世界があることを知るきっかけになりました。教職課程は3年生になる前にTOEICを450以上とらなければならないので苦労しました。2年生の秋学期は学習支援室に毎週のように行っていた覚えがあります。おかげで2年生最後の試験で超えることができました。

3年生は怒涛の1年であり、とても長期間なターニングポイントだったと思います。まずは4月に安田震一学部長のゼミに所属し、安田学部長の紹介もありインターゼミに参加しました。寺島実郎学長をはじめ経営情報学部の先生方とお話する機会ができたことはとても貴重でした。1年かけてグループで論文を書き上げるのですが、自分の努力の少なさを毎週身をもって実感しました。しかし、いろいろな人が私のことを褒めて支えてくださり頑張ることができました。夏にはI Love 湘南 Projectで藤沢市観光協会

さんの方々とFujisawa Foodiesという多言語メニュープロジェクトの活動をしました。2年生のときにインターシップに行かせていただいてから、就職のことを考えていたのでアピールになればと思い全力で活動しました。また、教育実習のために中学校に内諾の面談に伺ったり、介護実習など教職でも多くの活動していました。秋には学祭があり、当時の学生会長の西田さんから学祭を手伝ってもらえないかということで3年目にして初めて学内行事に裏方として参加しました。そこで先輩が増えたなと感じました。私はあまり先輩とも後輩ともかかわることが少なかったのによく話す先輩が増えてとても嬉しかったです。冬には安田学部長から地域イベントのアルバイトであったりボランティアワークショップのように学外の活動を紹介していただいたので、できる限り参加していました。年が明けてからは就活も本格的に始まっていたので年間を通して環境の変化が激しい1年でした。

4年生は私としては集大成となることをやっていると思います。まずは教職課程の集大成である教育実習です。就職が決まったこともあります。やはり教育実習の存在は大きかったです。毎朝、起きると今日一日頑張れるかすごく心配になるほど疲れているのですが、生徒の顔を見ると疲れなんて無くなってとても元気になりました。楽しくもあり厳しくもあるそんな3週間でした。私が4年間積み上げてきたものの1つであり、その集大成でした。一生忘れないと思います。他にもグローバルスタディーズ学部でホスピタリティマネジメントコースとしての集大成として8月末にICCO（文化交流創成コーディネーター資格）の短期集中セミナーに行きました。多摩大学第1号というのも魅力であったのですが他大学の学生との交流がしくて参加しました。1週間という短い期間だったのですが、新しく学ぶことや他大学との違いなど毎日発見がありとても嬉しかったです。資格は取得できているかはわからないですが貴重な経験をすることができました。

このような形で私の4年間をいろいろあったように書いてきましたが自慢できることは1つしかありません。それは、多摩大学で勉強してきて多摩大生として卒業できることです。私は自分から何かを手に入れようと行動したことはありません。いろいろな人からチャンスをいただいてこなしてきただけです。その結果が今に繋がってきています。今では第1志望の大学よりも多摩大学に来て良かったと信じています。だから、私が自慢できることは多摩大学から多摩大生として卒業できることです。



AEPの友達と



短期集中セミナーでできた友達と



シンガポールで友達と

第30回多摩大学多摩祭「グローバル・フェスタ 2018 in TAMA」を終えて

多摩祭実行委員長 渡邊 健史

2018年度多摩祭を終えて、実行委員長としての激動の一年もついに幕を閉じました。振り返ってみると自分一人では何もできていなかったと強く感じます。先輩、後輩、大学の職員の方々など、たくさんの方のご協力と支えがあって多摩祭当日を迎えることができ、そして両日とも大きな問題も無く無事に運営することができました。

多摩祭二日目は残念ながら雨が降ってしまい、来場者が例年と比べ減少してしまいましたが、それでも二日間合計で4000人弱もの多数の方に来て頂くことができました。足を運んで頂いた事に感謝すると共に、この仕事をやってきて良かったと改めて強く感じました。私が学んできたことを次の世代に繋げ、来年はさらに内容の濃い多摩祭になることを楽しみにしています。



多摩祭実行委員会 企画部部長 三浦 麻子

「パズル俺たちの作った30ピース」というのが今年が多摩祭のテーマでした。今年が多摩祭30回目であり記念すべき節目の開催であります。そのことを来場者にも是非知ってもらいたいと思い、スタンプラリー企画では全8か所のスタンプ場所を制覇すると「たまさい30かい」と完成するような仕掛けも作りました。

第1回多摩祭から始まって多くの諸先輩方が一生懸命作りあげてきた多摩祭に、第30回目の節目で私も関わることができ大変光栄でした。ご来場頂きました皆様には、諸先輩方の歴史とたくさんの方の熱い思いによって創り上げられた「第30回多摩祭グローバル・フェスタ inTAMA ～パズル俺たちの作った30ピース～」を楽しんで頂いたのであれば大変嬉しいです。



多摩祭実行委員会 会計部部長 今 建太

私自身、四年目の多摩祭が無事終了しホッとしているというのが正直なところです。

まずは、第30回多摩大学多摩祭「グローバル・フェスタ 2018 in TAMA」の開催にあたり、多くの方にご協力を頂いたこと、この場を借りて御礼申し上げます、本当にありがとうございました。ご来場頂いた学生、全てのお客様におかれましても本当にありがとうございました。

私は今年度で多摩大学を卒業致しますが、来年度後輩達が一回りも二回りも大きくなった多摩祭を創り上げてくれることを、心から期待しております。来年の多摩祭もぜひ楽しみに！

